

風の末裔シリーズ・7th シーズンの4
～雪の階（きざはし）～



日増しに白が増して行く、蒼の里の夕暮れ。

紫の前髪の娘が大荷物を抱えて、凍りかけた雪の道を、えっちらおっちらと歩いてた。

「リリ」

呼び止められて振り向いた娘の顔は、眉間に思いつきり縦線が入っていた。いつも下らない事で絡んで来る、毎度お馴染みのお節介者の声だったからだ。

「なあによ？ あっ」

声は予想通りのユウジーンだったが、彼の隣のサオ教官を見て、娘は焦って縦線を引っ込めた。

「久し振りだね、仕事は頑張っているかい？」

「はっはいっ」

「眉間にふっかいシワを刻んで、頑張っているよな」

「…!!」

サオ教官のいる所では、この娘は猫を被る。それが分かってわざとからかうユウジーンを、リリは憎々しげに睨んだ。

「これ、カノンが追加だって」

ユウジーンの手の中には、十冊ばかりの分厚い書物が抱えられている。

「あ、あら、まあ…」

リリの荷物も、結構な量の書物だ。彼女の父である蒼の長の自宅で勉学に勤しんでいる、カノンに届ける物だ。

西風の妖精は、寒さに物凄く弱い。夏の間だけの留学の予定だったカノンだが、長殿に才能を見いだされ、今が一番伸びる時期だからと、一人この地に残ったのだ。本当なら、とっくに南に帰っていなければならない。

先日までユウジーン宅に居候していたのだが、いよいよ雪が付き始めると、大きな暖炉のある長殿の自宅に移り、昼間はひたすら座学をし、夜は直々の指導を受けている。

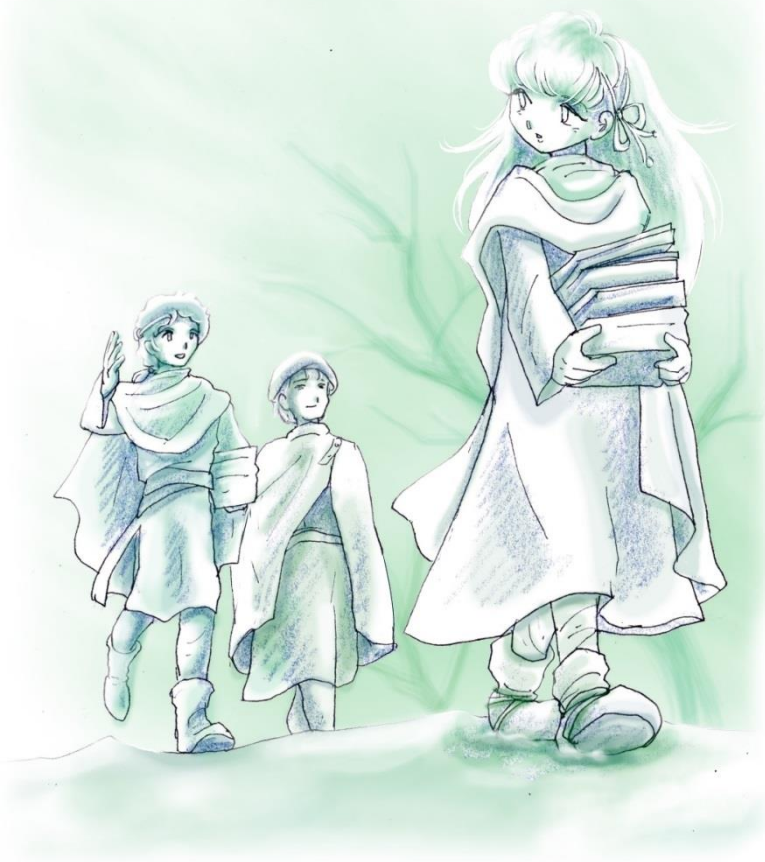
「あの子、まだそんなに読むっていうの？」

「これしか楽しみがないんだから、仕方がないよ」

今年は冷え込むのがいつもより早くて、カノンはもう春まで一歩も外に出られない。

リリだって、普段なら居候なんその為のパシリなんてまっぴらごめんなのだが（リリ談）、物理的に出られないのだから、仕方なしに頼まれてあげているのだ（リリ談）。けして、進んで親切をしている訳ではない（リリ談）。

「こんなには持てないだろ、俺が運ぶよ。そっちの書物も、この上に乗っけて」



屈んで、自分の抱えた書物のてっぺんを示すユウジーンに、リリはブイとそっぽを向いた。

「持てるわよ、この位」

そっぽを向いた側にサオ教官がいて、小さな手が抱えていた書物を、ヒョイと取り上げた。

「あっ、センセ」

「大荷物の子の横を手ぶらで歩くななんて、格好悪い事を私にさせる気かい？」

「ちゅ…」

紫の前髪の下の頬を真っ赤にして、リリは下を向いた。

まったく、いつも自信满满で、時として父親の蒼の長にすら喰って掛かる爆弾娘が、このサオ教官の前でだけは、別人のようになりおらしくなるのだ。

ユウジーンは、口の端まで出掛かったひやかしの言葉を「クックン呑み込んで、黙ってスタスタ歩いた。その事に關してからかったら、本気で怒らせて、向こう十日間は口もきいて貰えなくなるからだ。」

蒼の里の長娘、リリ。

年齢的には十代後半になるのだが、姿はまだ七、八歳のまま。

蒼の妖精の成長の仕方はまちまちで、特に長の家系は、たまに

極端にのんびりな者が出現する。そんなに気に病まなくてもいいと思うのだが、多分今が、一生で一番ムツカシイ年頃なのだろ。

「センセ、父さまに御用なの？ だったらまだ執務室だわ」

「いや、カノンにね」

「あら」

「ハウスの子供達が彼に会いたがってね。皆で訪ねて行ってもいいか、聞こうと思って」

ハウスというのはサオ教官の自宅で、親のいない子を引き取って育てているうちに、いつの間にか子供達の溜まり場になって、そう呼ばれるようになった。子供には安心できる居場所が必要なんだというのが教官センセの信念で、リリが彼を崇めている理由の一つだ。

「ああ、カノン、チビッコ達に人気だものね。そういう事なら彼は断らないと思うわ」

「リリは、いいかい？」

「なんで、あたし？」

「リリの家じゃないか」

「ああ…」

ユウジーンは傍らを歩きながら、黙って本を持ち上げ直した。

実は最近のリリは、ほとんど自宅に居ついていない。

一家に男の子が居候する事に、ハソを曲げるようなタマじゃない。父親と不仲って訳でもない。原因はもっと、本人にも整理整頓出来ない、複雑な所にあるんだ…。

丘の上の長殿の自宅。

奥の暖炉の間で、書物の山に囲われたカノンが、嬉しそうに三人を出迎えた。

遠い砂漠の国から来た、青銀の髪の少年。本人に自覚はないけれど、オレンシの瞳がミステリアスだと、里の女の子の噂の的になっている。リリに言わせれば、『一本ネジの緩んだカキンチヨ朴念仁(ぼくねんじん)』なんだけれど。

「はい、僕もハウスの皆に会いたいです。楽しみにしていると伝えて下さい。ああ、重かったでしょ、ありがとう」

礼を言って書物を受け取るカノンに、ユウシーンは何気ない風に話し掛けた。

「そういえば、レンが置いて行った玩具で、使い方が分からない物があるんだ」

レンはカノンと一緒に留学して来た西風の少年で、もう南に帰っている。



「どんなの？ 今度持って来て」

「うーん、多分どうせイタズラの道具だろうからなあ」

「レンの玩具なんかで、勉強中のカノンを煩わせちゃダメよ」

案の定、リリが口を挟んで来た。

「うん、ああ、リリでも分かるかな？ 後で見に来て貰える？」

「いいわよ」

暇（いとま）の挨拶をして、ユウジーンはサオ教官と並んで、

里奥へ戻る道を歩いた。

「リリにしては、やけに二つ返事だったねえ」

「ええ…」

口実は何でもいい。兎に角用事を作ってやれば、彼女はいそいそとユウジーン宅に来て、何やかやとお喋りを長引かせ、眠くなったと、レンの使っていたベッドに潜り込むのだ。

そうしてやらないと、執務室の長椅子ならまだしも、たまに厩や放牧地で夜明かしてしまうのだ。

「あの子はどうして、家に居たがらないのでしょうかねえ」

やっぱり、このヒトなら気付いていたか。ユウジーンは言葉を選びながら、慎重に喋った。

「長殿が…、カノンに術の指導をするの、妨げになりたくないんじゃないでしょうか」

「妨げになるのかい？」

「彼女とカノンじゃ、進歩の度合いが全然違うから。多分、カノンが自分に気を遣うかも…って、思っちゃうんですよ。彼が今、大事な時期だって、本人以上に強く思っているし」

「………」

「何にしても、リリが風邪ひいたりしたら、俺達にもいい事なかないですから。寝床を提供するくらい、どうって事ないですよ。小さい頃から面倒見ている、妹みたいなものだし」

これで全部じゃないけれど、ユウジーンはその辺で話を切った。

「だったら、たまにはハウスの方にも泊まりに来てくれれば…」

「その誘いだけは、絶対にしちゃ駄目です！」

「どうして？」

「どうしてもですよ、お願いします」

怪訝な顔のサオ教官に手を降って別れ、ユウジーンは雪道を歩いた。

あのヒトには、彼女は、クールな長娘の面だけを見せていたのだ。間違っても情けない同情なんてされたくない。

「…ったく、じゃあ、俺は何だったの…」

独り言は、降り始めたボタン雪に溶け、ユウジーンはレンの残していった玩具から適当な何かを引っ張り出す為、足早に自

宅へ急いだ。

朝…、夕べ、あーだこーだと弄くり倒した末に余計に壊してしまつた何かの発射装置がパオの真ん中に転がり、寝具を畳んでリリの姿はなかつた。いつもの事だ。

一番鶏が鳴く前に出て行つてしまい、ユウジーンが起き出す頃には、もういない。朝食の香りと共に爽やかに起こしてくれとは言わないけれど、オハヨウぐらい言つてくれてもバチは当たらないだろ。

坂の上の執務室に一番に来るのは見習いの若者で、彼が掃除を済ませる頃に、大机を預かるホルズ、次いでナーガ長が姿を現す。二人でその日の仕事を相談しながら割り振つて、次々に出勤して来るメンバーを、随時送り出す。

「朝礼とか、ないんですか？」

と、修練所出たてのヒヨッコが驚くが、いちいち集めて号令を掛けずとも、一人一人が来るべき時間に来て、やるべき事をちゃちゃつとやった方が、合理的だ。

大昔、ナーガの叔父の大長と、その三人の弟子から始めた執務室は、半ば伝統的な形式のまま、ゆるく長く継続していた。

そのゆるさの最たる象徴が、馬繋ぎ場に向かうメンバーの流

れに逆らつて、今、坂を駆け上がつて来た。

「ただいまっ、戻りましたっ」

紫のザンバラ頭のリリ。毎朝、見習いよりも更に早い時間に出勤し、皆より一足早く、一件片付けて来るのだ。

「おかえり、リリ」

ナーガ長は、夕べどこに泊まつたかとかは、もういちいち聞かない。この娘が、こんなな事心配されるような子供じゃないわよぐつて、仕事で証明しようとしているのが、ひしひすと伝わるからだ。

「森の宮の峠の案件ね、急ぎだったので助かったよ」

「ふんふん」

リリは文字が読めない。意味のない物の形を覚えるのが、極端に苦手らしい。

なのに、うす高く積まれた仕事依頼の手紙から、緊急性の高い物を、スバツと嗅ぎ分ける。しかも、手紙に触れただけで、用件が分かる。書いた者の心を読み取れるというのだ。スゴい！万能じゃないか？！

「いやいや、それが、たまに…」

「峠の落石は大きかったかい？ 一人で処理するのは大変だっ

たろっ。

「へ？ 落石で村のヒト、助かっていた筈よ？ 税を払えない家の子供達が、ヒト買いに連れて行かれるのが足止めになって。依頼は、宮司の税のピンハネを摘発してくれ…ってのだったでしょ？」

「……」

「暗いうちに宮の倉庫を開いて、横領していた穀物を、村の広場に積み上げといたわ。それで良かったんでしょ？」

「……」

「なんて事も起こったりする。まあ、それが、手紙を書いた者の本心の依頼だった訳だ。」

えっと…、蒼の一族は、風と大地を司る、所によっては神扱いされる存在だ。便利屋とは違うのだから、依頼をしても聞いて貰えるとは限らないし、何でも思い通りって訳にも行かない。リリみたいな対処で、本来オツケーなのだ。」

「まあ、今日はもう一、二件やつつけられるかしら。泊まりの仕事があったら、優先して頂戴」

腕捲りする娘に、ナーガは苦笑して、ホルズに目配せをした。

「実は、リリ、ノスリ殿やホルズと話し合って、決めた事がある。リリにも関係ある事だ。座りなさい」

「なあに……」

娘はちょっと不安そうに、長椅子に腰掛けた。

ナーガは大机に付いて両手を組み、ホルズは窓際のソファに移動した。

「先日の騒動…、あの十字の光の意味、リリにも話したよね」

「は、はい……」

「蒼の里が今までやって来た事を否定する光だった。勿論私は、蒼の長として、皆こやって来た事を覆（くつがえ）しはしない。しかし今までを省（かん）がみる事は必要なんだ」

「省みる……？」

緊張するリリを助けるように、ホルズが口を挟んだ。

「例えば、今日の森の宮の依頼みたいに、手紙に書かれた本心じゃない方の依頼を、そのままホイホイやって、それでいいのか？ って事だ」

「ああ……」

分かりやすい例え話に、リリはちょっと安心顔になった。

ナーガもリラックスして掌を組み直した。

「そう、それでね、これからは、依頼をもっとちゃんと吟味し、絞って行こうと思うんだ。執務室の者も、今まで忙し過ぎたからね。この機会に、ただ働いただけでなく、それぞれの才能を磨

く事とか、出来ればいいと思う」

「ああ、それは素敵なお事だわー」

リリは、ユウジーンがカノンと一緒に歴史の本を読んでいる所とか、ユウジーンがヤンやフウヤと色々な土地を旅している姿とかを、思い浮かべた。

ナーガも、娘の賛同を得られて、にっこりした。

「それで、その依頼を絞る作業に、リリの力が必要になる」

「え…」

「分かるだろう？ 大切な事、本当の事を、一直線に見極める、リリだけの能力。その力を一番に発揮出来る仕事だよ」

「あ、ええ…はい…」

リリは、気の抜けた返事をした。

「助かる、明日の分から、早速頼むよ。リリのペースでいいからな。今日の昼は休んでいいから、書類の貯まる夕方、また来てくれるか？ ゆっくり体調を整えておけ、な」

ホルズに優しく言われ、リリは茫然と、外に出て歩き出した。

えっと…

それって…どういう事…

気が付くと、里奥の放牧地の牧柵に座り込んでいた。まだ明るい時間に、こんな所にいるのは久しぶりだ。

「どうした、珍しいな」

声に振り向くと、サオ教官だった。修練所は一限目が終わった時間だ。教官室の窓からリリを見付けて、わざわざ来てくれたのだろう。そういうヒトだから。

「仕事が早く終わったのか？」

「い、いいえ、ちょっと休憩です。これからまた行きます」

「そうか、身体を壊すなよ」

去りかける教官に、リリは思わず声を掛けた。

「あっ、あの…」

「ん？」

「あだ、あたし、今日から、内勤になったんです」

「んん？ それって」

「依頼の吟味とか、そういう仕事…」

「おお！ ということは、長殿やホルズ殿と共に大机を預かる、責任ある立場に付いたのだね。そうかそうか、うん、あのリリがなあ…」

教官は、感激と期待に満ちた顔で、リリを見た。

…やっばり、そういう事なんだ…

「おめでどう、リリならきくと、ちゃんとやり遂げられるよ」
大好きな教官センチの声を遠くに聞きながら、リリは鉛の中

に沈んで行く気分でした。もう、好き勝手やっていた、自由な子供でいられない。蒼の里の運命と責任を背負う、長の道を歩まなければならぬんだ。

境目のない灰色の空と草原が、地平で溶け合っている。ハイマツの丘は、今は白い綿布団みたいな雪に覆われていた。

地風に吹き上げられた雪が、紫のざんばら髪に、霧氷みだいに掛かる。それを払おうともせずリリは、もう随分と長い事、ここに立っていた。

「カーたん・・・」

呼んだって、勿論、応えてなんか貰えない。ただ甘えてすがりただけの呼びかけなんか、あのヒトに届く訳がない。

鼻がツンとしてまぶたが熱くなったので、頭をぶるぶる振って、雪と共に泣き虫を振り落とした。

逃げないって決めたじゃない。カーたんやしんりいに恥ずかしくない生き方をしないと、いつか逢えた時に、胸を張れないじゃないの。例えば、長としての能力が、何ひとつ開かなくたって…。

そこまで口の中で呟いて、リリはまた、細いため息を付いた。

あの、空の十字の光が落ちて来た時…。

夢中で外に駆け出て、父さまを手伝っただけと…、反対側

で掌を掲げるカノンの力の凄かった事。ガツンガツン光を跳ね返していたっけ。普段は虫も殺さぬ顔をしている癖に、何なのよ、あの底抜けの地力だ。

ああいうのを、本当の長の血の力っていうのだから。それに比べて、自分の力の貧弱だった事…。

リリは頭を振って顔を上げ、愛馬の若紫を呼んだ。

もう夕刻だ。執務室に行かなくちゃ。

「・・・」

馬は呼ばれても動かず、丘の端から、遠くを凝視している。

「どうしたの?」

側に寄って視線の先を追うと、草原に複数のヒト影が見えた。

「・・・?」

不穏を感じた。

複数の大人が、子供を囲んでいる。大人は他所の種族だが、

子供達は、草の馬を連れだ蒼の妖精だ。

「——!!——!!」

リリは若紫に飛び乗って、そちらへ飛んだ。

近寄ると、囲まれて身を寄せ合うのは、サオセンセのハウスの子供達だ。

「あんた達! どうしたの?!」

大人達は、リリの登場で、ひるんで後ずさった。北東の山岳部族の服装だ。ざっと見た所、馬車があって商人風だが、風采がよくない。

紫の前髪の娘が、旋風を起こして、彼らの前に飛び降りた。背後には若紫が回って、挟み撃ちにする。

「この子らに何をしようとした！ 場合によっては許さぬ！」

「わあ、待って待って！ 悪さんかしていない！」

リリの迫力に、ただの女の子ではないと悟った男達は、慌てて両手を上げた。

「その子供達に、物々交換を持ち掛けていただけだ。対等な取り引きだ。勿論、脅してなんかいない」

「交換……？」

リリは、手を取り合う子供達を見た。

子供でも、上級生になると、教官の許可を取って草の馬で外乗りに出る事が出来る。もっとも、あまり沢山は飛べないから、里の周りをチヨロチヨロする程度だ。

「なっ、坊主、おっちゃん達は、優しく交渉してただけだよなっ」

引きつった笑いを浮かべる大人に、一番年長そうな子供が答

えた。

「うん、まあそうだけれど……、でも、草の馬を交換なんて、出来ないよ」

「何ですって?!」

リリは髪を逆立てた。

子供達は味方を得たり！ と、リリの後ろに回った。

「そうなの、断ってもしつこくして。小さい子を丸め込もうとするし……」

「……」

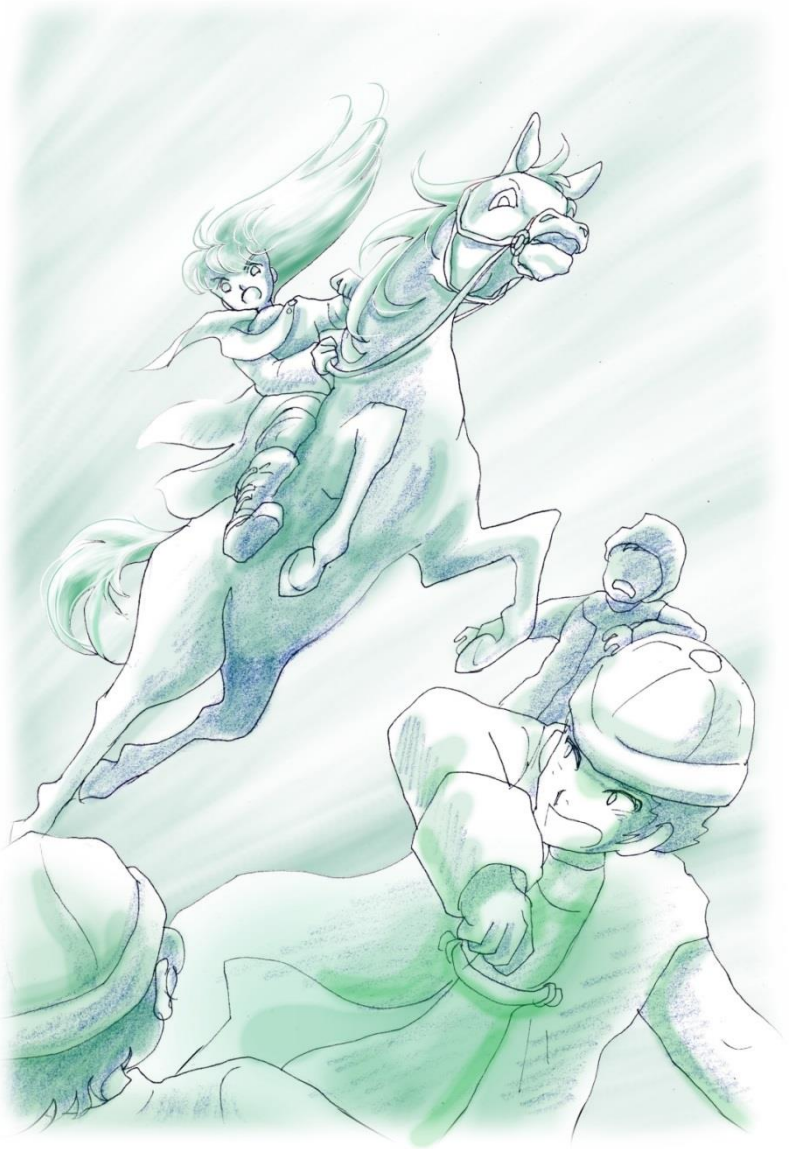
確かに、空飛ぶ草の馬を欲しがって売ってくれと言っ者には、たまに出会っ。知らなければ、普通の馬と同じに考えていても、罪ではないだろう。だとしても、分別付かぬ子供を狙い打ちにするなんて、せい……!!

紫の前髪の娘は、大きく息を吐いて、男達に向き直った。

「草の馬は、風の妖精と共にあり、蒼の一族にとって、一生を共にする存在です。一人一人にとって、代替りの馬なんてないし、手放せるモノではないのです」

「だからあ！ こちらも、相應の物を払おっって言っつてんだ、お嬢さん」

男の一人は、余程草の馬に執着があるのか、諦めずに粘った。



「どんなにお金を積まれたって…」

「金じゃねえ、蒼の妖精が金銀で動かないのは知っている。もつと価値のある物だ」

「何を積まれたって……!!?!」

リリは、男が、馬車の荷台から大切そうに取り出した『それ』を見て、大きく目を見開いた。近寄ってよく見て、眉を吊り上げたが、触れてみると、今度は顔色が青ざめた。

「こ、これを、どこで……?!」

蒼の里の修練所。

里の子供は、七つ位から、おおむね通い始める。

人間の学舎と同じに、読み書き計算から始めて、個々の特性に応じた教室に進み、だいたい七、八年で修了する。単位数と決め事はあるが、ノルマはアバウトで、とっとと終える子もいれば、他の事をしながらたまに通って、のんびり卒業する子もいる。

サオ教官が主任の一人に就いてからは、数字の決め事が更に柔らかくなった。柔らかくなったからって楽になる訳ではない。教職員は個々の生徒を、よりの綿密に見なければならぬなり、子供達は自主性を問われた。

決め事って、誰かが楽チンする為にあつたんだ。でも、修練

所では楽チンは要らないと、熱血教官は頑張っている。

そのサオ教官が、山のような書類を抱えて、放課後の廊下の角で、走って来た数人の子供とぶつかりそうになった。

「おっと」

避けた弾みに散った書類を、先頭の子から順番に受け止めた。ハウスの子供達だ。

「はいセンセ」

「おお、ご苦労。廊下を走るな、その分外で走れ」

「走ってないよ、早歩きだよ」

「画足地べたに着いてたもーん」

「ヘアズロども、次にぶつかって来たら、はね飛ばしてやる。それはそうと、今日は外乗りに行ったんじゃないのか？ 随分と早いな、誰か怪我でもしたか？」

「い、いいえ…えっと、用事を頼まれて…」

子供達の歯切れが悪くなったので、教官は何かがピンと来た。

「んん？ 校舎に用事か？」

「うん、そう！ 図書室に用事なのー！」

「書物を借りるのー！」

「なに？ お前達がか？」

「違う違う、カノンに持って行くの」

子供の一人が、カノンのきつちりした文字のメモ書きを、ヒラヒラさせた。

「むむ…」

しかしそれは、リリの他人に譲りたくない日課だった筈だ。

毎夕書物を届けては、翌日のリクエストのメモを受け取る。

「そのメモはリリの持ち物だよな。リリが、お前達に頼んだのか？」

「うん、あのシツムシツの女の子から、さっきたのまれたの。

あの子はキュウヨウができたからって…」

「くら、じっ！ センセ、さよーならー！」

ウツカリ者の小さい子の口を塞いで、子供達は団子になって、廊下を『早歩き』で駆けて行った。

「うーん…」

サオ教官はちょっと迷ったが、子供達を追い掛けて問いただすのはやめた。誰かとした口止めの約束を守ろうとしているのなら、それを破らせるのは、可愛そつだ。

それより、もしリリが、子供達と約束を交わせるような間柄になったのなら、喜ばしい事だ。

その時のサオ教官の判断が、その夜の大騒ぎに繋がるのだが……。

蒼白なユウジーンに連れられて、サオ教官と子供達が、執務室の御簾をくぐった。

「遅くにすみませんね」

奥の大机から、ナーガ長の急いた声が出た。執務室には彼一人だ。机上に大きな石板。

「いえ、こちらこそ。この子達が、長殿に直接でなければ話さないって頑固に言うものですから。申し訳ありません」

サオ教官も青ざめて、困った顔で子供達を振り返った。

「あの、ナーガ様、何か分かりましたか？」

ユウジーンが机の前に進んで、石板を覗き込んだ。

「いや…」

ナーガの長い指が、石板に刻まれたこの辺りの地形を辿る。

いつもならこの方法で、同じ血を持つリリの居場所を知る事が出来た。娘が里のどこで夜明けかししようと、たまに里から家出しようと、こうして居所を把握出来ていたから、長殿は、彼女の好きにさせていた。

リリもそれを承知していたから、ある意味『心配をかける心配をせずに』放浪出来ていたのだ。

「心配が消えてしまったって、あいつ、いったい…」

「存在しているのだけは分かるから、無事ではあるのだが。気配がこんなに薄くおぼろになってしまふなんて、今までなかった。本人がやっているのか、何か他に原因があるのか…」

「長さまから『隠れる』って言っていたよ!」

小さい子が叫んで、皆が顔を上げた。

「バカ、順番があるだろ! 約束通りにしなきゃ」

大きい子が、その子の口を塞いだ。

「順番なんかいいから、全部話すんだ!」

怒鳴るサオ教官を制して、長が机の向こうを回って、子供の前に来て屈んだ。

「順番通りに話しておくね」

「えっとね、まず、これ…です」

一番大きい子供が、上着のポケットから、紫のスカーフを引っ張り出した。今日、リリが首に巻いていた物だ。

「皆が自分のいないのに気付いて、心配し出したら、長さまに渡してくれって」

長は黙ってスカーフを受け取って、掌を当てた。途端、リリの高い声が響いた。

《父さま、ごめんなさい。あたし、どうしても解決しなきゃな

らない用事が出来たの。執務室に穴を開けてごめんなさい。帰ったら倍働くから、許して》

「それだけ?」

シンとなった後、ユウジーンが叫んだ。

「あいつ、説明は? 用事って何だよ? そんな勝手な事…」

「ユウジーン、取り敢えず事故ではなく、自分の意思だというのが分かっただけでも、よかったよ!」

ナーガ長は、スカーフを見つめながら言った。

「こうなったら、洗いざらい喋って貰うぞ。風間、外で何があった?」

ユウジーンは気炎を吐いて、子供達に迫った。

「言えないよ、約束だもん」

「そんな事を言っている場合じゃないんだぞ」

サオ教官も言うが、子供達は目をキョロキョロさせながら、口をつぐんでいる。

「言え!!」

ユウジーンが一步前に出て、大きい子の胸ぐらを掴んだ。

「ユウジーン…」

ナーガ長がたしなめようとする前に、隣の子が叫んだ。

「ジーン！ 自分の胸に手を当てて！」

「っ？」

ユウジーンは大きい子から手を離して、そちらの子を見た。

「何だって？ どういう意味だ？」

「分かんないよ。あのオンナノコが、ユウジーンがだれかの胸ぐらを抱んだらさう言えくって」

「……………」

ユウジーンは呆気に取られながら、自分の胸元に手をやった。

「あっ」

そして思い出した。

そこには、リリとお揃いの小袋のペンダントが掛けられていた。自身は、半分コにした緋色の羽根だ。そう、リリが何かピン手になった時は、この羽根が震えて教えてくれる仕組みになっている。今まで一回も震えた事がないから、忘れていた。

「今は心配には及ばない、危険になったらちゃんど伝えるから、……って事だろう」

ナーガ長が、ユウジーンの肩に手を置いた。

「伝言はそれだけか？」

サオ教官が、心底困り顔になって、子供達を見回した。

それまでじっと教官の顔だけを目で追っていた子が、スイッ

チが入ったように叫んだ。

「センセ、この子達を叱らないでね！ 約束を守る、とてもいい子達だわ！」

「そ、それも伝言か？」

「うん、サオセンセの盾が、この角度になったら言いなさいくって」

その子は、両手を合わせて、ハの字より急な角度を示した。

「……」

大人三人は、目をまん丸にして顔を見合わせた。

子供達の中に、まだスイッチの入っていない子が、口を膨らませて、大人の様子を凝視している。

「あ——・・・」

「あ——・・・」

ナーガ長が、沈黙を破るように言った。

「とにかく、リリは大丈夫なようだ。この子達に伝言を割る余裕がある位だから、切羽詰まった事態でもないのだろう。帰りを待とう。サオ教官、ユウジーン、心配をかけて申し訳なかったね」

「いえ、そんな……？」

「いえ、そんな……？」

言いかけて教官は、喋るタイミングを逸して、口をパクパクさせている子がいるのに、気付いた。



「今の、5つだった？」

「4つ位だった気がする…」

「何だ？ リリの言った合図は、何だったんだ？」

「長さまが、5つ数える以上長いへあ——を言ったら、言いなさいって」

蒼の長は、その子の前に屈み直して、両肩に手を置いて、大きく口を開いた。

「あ——」

指折って数えた子は、満足の表情で言った。

「もうバれていると思うけれど」

「あだし、父さまの術から隠れる事が出来るの」

「ナイシヨにしている、コメンね」

一番小さい子まで喋り終えて、子供達は肩の荷を降ろした表情で、ニッコリした。

「結局、どうでもいい伝言ばかりで、肝心の中身は分からず仕舞いじゃないか」

ユウジーンが、悲鳴みたいに言った。しかし、もうスイッチは出尽くしたようで、子供達は口を一字に結ぶばかりだ。

「その他の事を話してくれるつもりはないのか？ リリはそんなにきつく口止めをしたのか？」

サオ教官も、一人一人の顔を見ながら聞か、彼等の表情は変わらない。

「いいですよ、皆、」苦勞様でしたね」

長が優しく言った。

「ナーガ様、でも……」

「リリの考えを尊重しよう。あの子は理由もなく、子供達に厳しい約束をさせたりはしない」

執務室を出る時、長は最後に、皆に聞いた。

「君達は、リリと仲良しだったのかい？」

子供達は顔を見合わせた。

「ううん、ほとんど今日初めて喋ったのみ」

「思っていた程怖くなかった、あの子」

「そんなに仲良しじゃないのに、一生懸命約束を守ろうとしてくれたんだね。ありがとう」

「そうだ、お前達、私と交わす約束は、すべてっほかす癖に」

サオ教官は、しよっちゅう言い付けを破って、イタズラしたり宿題を忘れたりする面々を、睨んだ。

「違つよ！ あのオンナノコと約束したんじゃない」

「ええっ?!」

年長の子がいきなり言った台詞に、大人達は身を乗り出した。

予想外の第三者の登場か？

「草の馬に誓わされたんだ。各々の自分の馬に」

「……………」

「蒼の一族にとって、草の馬は一生を共にする、絶対裏切っちゃイケナイ存在なんですよ？ センセ、いつも授業でそう言っているよね」

「……………」

長は、目を大きく見開いて絶句していたが、やがて脱力して苦笑いした。

「参った……」

明日は忙しくなるから今日は帰って休みなさい、と言われたコウジーンと、サオ教官と子供達は、夜の道を里奥に歩いた。

「まったくリリ……あいつ、子供達まで巻き込んですみません、サオセンセ」

「いや……」

教官は、少し嬉しそうだった。

「私は、リリに感謝しているんだよ。毎日側で暮らしていても気付かなかったこの子達の素敵な一面を、見せて貰えた」

「買いかぶり過ぎですよ。ただ意地張って、一人で行動したいだけなんだから」

「そっかい？ 彼女はそんなに子供ではないと思うが」

「子供ですよ！ だからいつまでも、長になる事に向き合えないで、逃げ回っているんじゃないですか」

言ってしまったから、しまった！ と思った。リリがこのヒトに、一番聞かせたくない言葉だ。

「す、すみません、今の、無しです。聞かなかった事にして下さい」

「ユウジーン…」

「あいつにとって、センセだけは特別なんです、だから…」

教官がちょっと寂しそうな目をしたのに、ユウジーンは気付かなかった。

「分かったよ、でもね、ユウジーン。リリは君の家に『逃げ込んで』いるのだろうか？」

「…」

「あの子は、ただ単に、安心して眠りたい…、それだけなんじゃないかなあ」

「は…」

分かれ道が来た。

ユウジーンは釈然としない顔をしたまま、会釈して別れた。

サオ教官と子供達は、更に里奥のハウスに向けて、並んで歩

いた。

（私は、特別…か…）

特別というのは、そんなに嬉しい事ではない。だからあの子は、自分には纏った姿しか見せてくれないのだ。

教官は、小さくため息した。

それは仕方がない。自分は彼女に対して、大きな間違いをした。あの子が、教官としての自分を必要とした、本当の子供の頃に…：…気付いてやれなかったのだ。

リリが入学して来た時、正直戸惑った。文字が覚えられない、術の力だけはやたらと強い子供。それでも、その事実を何とか理解しようとした。

彼女の従兄弟のシンリィは、文字どころか、言葉すら無い世界に任んでいた。言っちゃ何だが、長殿の家系って特別なのかも…と思った。多分、自分の他にも、多くの大人がそう思っていた。

ほどなくリリは、『文章が書かれた紙に触れるだけで、書いたヒトの心を読み取る力』を、発揮し出した。

ほら、やっぱり長殿の血は特別なんだ、心配しなくても、生まれながらに、それなりの能力を持っている…、自分も、他の大人と同じにそう思って、安心してしまった。そして、長い間気付かなかった。

——違ったんだ。

彼女のその能力は、『大人をがっかりさせない為に』、死に物狂いで、会得した物だったのだ。

他の子供が当たり前前に読んでいる石板や紙に、気の遠くなる時間、集中して挑み続けた末に、たまたま出来るようになったのだ。

誰もが当たり前前に出来る事に、いちいち躓つまじくくり。その度に生真面目に立ち止まり、道を探す所から始めなければならぬ。

最近になって、やっと知ったのだ。

彼女が本当に心を開いて、そういう事を話した相手。西風から来た、レンとカノン。彼らが教えてくれた。ごく普通の日常会話の中で、さらりと。そして、彼らと過ごす屈託のない時間の中で、初めて見せた解(ほど)けた表情……。

思い知らされた。この子が修練時代に必要だったのは、文字を解するようになる事じゃなかった。単位だけを積み重ねて、修了証を手にする事でもなかったんだ。

「ねえ、センセ」

並んで歩く年長の子に声を掛けられて、教官は考え事から戻された。

「んん？ なんだい？」

「ジーン兄ちゃん、絶対あのオンナノコ的事、スキだよね」

「タダ分かりだよね！」

「ロリコンなの？ ねえ、ジーン兄ちゃん、ロリコンなの？」

子供達は、執務室の緊張感は何処へやら、もういつもの感じでお喋りしている。

「そんな事、あいつの前で言うなよ」

「分かってるよ、センセ」

「センセが応援してやれっていうなら、僕達協力するよ！」

「何もせんでいい。むしろ、何もしないでくれ」

サオ教官は、ユウジーンの自宅の方を振り返った。

あの紫の前髪の娘が、里で唯一熟睡出来る、彼の家の壁際のベッド。レンやカノンと過ごした、ただただ安心出来る空間。その景色には、きつとユウジーンも居るに違いない。

「本当に特別なのは、誰なんだろうな」

以前、夜明け前の凍った道を、執務室に出勤するリリに、声を掛けた事がある。当たり障りのない挨拶をして、身体を壊したら元も子もないんだから、もっと睡眠を取ったらどうだ？ みたいな事を言った。

紫の前髪は、眉を吊り上げて、こう言った。

「ユウジーンの家を、朝のんびり出る事なんか出来ないわ。そんな所誰かに見られたら、あらぬ噂が立って、彼、ますますお嫁さんの来手がなくなるじゃない。いい加減、イイヒト見付けて、チョンガー暮らしてから脱出しなきゃならないのに。センセ、彼のバオの中、見た事あります？ 台風の後の波打ち際の方がまだマシだわ」

「やっぱり来た…」

長の自宅の暖炉の間。朝の修練の座禅を組んでいたカノンは、入って来た青年に目を上げた。

「やっぱりって？」

三重の御簾をくぐって、ユウジーンの目の下に隈を作った顔が覗いた。

「長殿が、自分が出動した直後にユウジーンが訪ねて来るだろうって」

「……」

「僕に、リリの行方を探ってくれて、彼女の持ち物を色々持った」

「……」

ユウジーンは無言で、自宅を掻き分けて拾い集めた、リボンやらボタンやらを、ポケットから引っ張り出した。

「うわあつ、ホンッとユウジーンって、分かりやすいんだね。それって剣士としてどうかって、長殿、心配してらしたよ」

「それは…自分で分かっているから。カノン、頼む」

ユウジーンは、少年の目の前にそれらを並べて、懇願した。

「えっと…」

カノンは困った顔で、こめかみを掻いた。

「ナーガ様に止められているのか？」

「ううん、長殿は何も仰らないよ。でも、僕の『物から持ち主の居場所を見付ける術』も、長殿の『同じ血を持つ者を探す術』と同じだと思うんだ」

カノンは、紫の大振りのリボンを摘まんで、目を閉じた。

「んーん…やっぱり、駄目みたい」

「そうなのか？」

「うん、持ち主の『隠れる意志』がこんなに強いんじや。僕なんかじゃ、リリには太刀打ち出来ないよ」

「………」

「ねえ、長殿が本気で全力を出したら、多分、リリの居場所なんて、あつという間に突き止められるよ。それをしないのは、長殿が、リリの意志を尊重したいからなんですよ？」

「分かっているよ！ カノンまでそんな事を言うんだな」

ユウジーンが語気を荒げたので、少年は黙った。

「カノンなら、あいつが皆が思っているより、全然子供で危なっかしい奴だって、分かっているだろ？ ペンダントの羽根が震えて教えてくれたって、危険に遭ってからじゃ遅いんだ！」

「ユウジーン…」

カノンは眉を寄せて少し困っていたが、手に持ったリボンに両手を掛けて、ピリピリと縦二つに裂いた。

「カノン？」

「これ、半分づつ持っていよう」

「??？ 何かの術か？」

「正式な術ではないけれど、西風でたまにやる、逆御守りだよ。

二人でへ無事でいてくれって念じていけば、目に見えない力になる」

少年は、リボンを左手首に巻いて結んだ。

「…効果があるのか？」

「リリの『隠れたい』って意志が効くのと同じように、『護りたい』って思いも効く筈だよ。本当は数が多い程いいんだ。レンもいたらよかったの」

ユウジーンは狐に摘まれた気分だったが、何せ長様も一目置く、術者の卵カノンだ。飄々としながらも、ナチュラルに、有効な方法に辿り着いているのかもしれない。



「護りたい意志を切らさないように。あ、でも、仕事中は仕事に集中して、気を付けてね」

リボンを受け取って不器用に手首に巻きながら去る青年に、カノンは心の中で手を併せて謝った。

（じめんね…）

こんなの、術でも何でもない、今思い付いたデタラメだ。

「だけれど…」

ユウジーンの身体中の血は、『リリを心配する方向』に、全力で流れている。ていうか、四六時中リリを心配している塊（かたまり）が服を着て歩いているのが、ユウジーンだ。他人が幾らへりりは大丈夫だよって言っても、無意味なのだ。

「ぶっ、やっと今日の分の本が読める」

ユウジーンは、左手首のリボンをヒラヒラさせながら、執務室に走った。思いの外、遅くなってしまった。ホルス様に大目玉だ。しかし、急ぐ青年に声を掛ける者がいた。

「ジーン兄ちゃん、おはよー」

昨日の子供達だ。一限目が乗馬訓練で、厩舎の方に直接登校なのだろう。

「ああ、おはよう、勉強頑張れよ、またな」

そそくさと去り掛けた左手を、子供は目ざとく見逃さない。

「オンナノコのリボンだあ！ あの子の？ おまじない？」

嘩（はや）し立てる気満々の子供達を振り切ろうととして…、

ユウジーンはふと足を止めて、振り向いた。

「なあ、お前達…？」

蒼の里より少し離れた、北東の山岳地帯。

山に囲まれた盆地に川が流れ、そこそこ多くのヒトが住んでいる土地だ。商人が行き交う、大きめの街もある。

今、街の入り口を、風采の上がない男達の平凡な商人馬車が、通過した。ちょっと異質なのは、小さい子供を連れている事だ。

「真ん前に着けなくていいわ。離れた所で降ろして、場所だけ教えて頂戴」

マントのフードを頭からすっぽり被った子供は、きびきびした声で言った。

「な、なあ、嬢ちゃん、約束どおり、夜通し走って案内して来てあげたんだから…その…」

大の大人達は、何かに怯えた感じだ。

「分かっているわ。蒼の里にも長ささまにも、黙っていてあげる。

この件は公(おおよけ)にしないで、あたし一人で処理するか
ら」

「ホントだよ、約束だよ。蒼の里を怒らせたとなったら、俺達
何処に行っても商売出来ない」

「分かっているわよ」

「そもそも俺達は、これがそんなにヤバイ物(フツ)だなんて、
知らなかったんだ」

男達は、馬車の後ろの荷台にポツンとある包みを、爆弾を見
るみたいな目で見た。

「信じるわよ。分かっていたら、蒼の里の側にわざわざ来て、
里の子供にチョッカイ掛けるようなマヌケな真似をするもんで
すか」

「そうだろ、そうだろ！」

馬車は、中央広場から、幾つかある通りを見渡せる場所で、
停まった。

「あそこの突き当たりの緑の柱の建物だ。表が取り引き場所で、
奥が多分、倉庫」

「そう、ありがと」

女の子は包みを掴み、馬車のへりをボンと蹴って降りた。

「ケリが付いたら、これとマントは、後で必ず返すわ」

「いや、それより…えーと、嬢ちゃん」

「ん？」

「俺達や、その物(フツ)に、そこそこの金貨を払っているんだ。
その…それはもう要らないから、金貨で取り返して貰えると、
有難い」

フードの下の小さな口が、キュツと結ばれた。男達は一瞬緊
張したが、女の子は、「分かった」と乾いた声を残して、マント
を翻して駆けて行った。

突き当たりの建物は、商店だった。

雑貨や骨董を扱っている体裁なのだが、看板も出ていないし、
間口も狭く、如何にも胡散臭い。

女の子は、軋んだ戸口を開けて、奥に歩いた。薄暗いカウン
ターに、気弱そうな大男が、身体を起こした。

「何か用か？」

客商売としては零点だ。

「これと同じ商品が欲しいの」

女の子は包みをカウンターに置いた。男はフードの子供を疑
わしそくに睨みながら、包みを開いた。

「……何処で、手に入れた？」

「何処でって？ お屋敷に出入りの商人が、先週持って来たの

よ。あらちょっとどこのお屋敷かは、旦那様の命令で言えない
んだけれど。でもうちは、お子様が六人もいらっしやるから、
取り合いになってしまつてね。あと五つ要り用だと言つたら、
商人がここを教えてくださいの」

奥の御簾がいきなり開いて、頭が禿げ散らかした小男が出て
来た。

「どけ、俺がお相手する」

氣弱そうな大男は、蹴飛ばされるようにカウンターの隅に押し
込まれた。

「で、お嬢さん、入り用なのは、これと同じ物で？」

小男は、女の子の持つて来た、柄の長い三弦を掴み上げて言
つた。愛想笑いがここまでナチュラルに胡散臭いのも珍しい。

「そう！ 有名な風露ブランドの楽器でしょう？ 旦那様が是非、
お子様達に持たせたいと仰つてね。下の坊っちゃんまは小さい
いから、大中小と揃うと嬉しいんだけれど」

「へえ、今、在庫を調べます」

小男が御簾を上げて、再び奥へ戻ろうとした。

「待って！ ねえ・・・」

呼び止められて、男は止まった。

「これって、注文でないと手に入らないって聞いた事があるわ。

在庫があるってどういう事？」

「独自のルートがあるんでさあ」

男は背中を向けたまま答えたが、低い声だった。

「うそ！ ラウ老師がそんな事、許す筈がない・・・」

女の子が言い終わる前に、いつの間にか後ろに回り込んでい
た大男が、飛び掛かって来た。

しかし女の子は、ツバメみたいな身のこなして太い腕をかい
くぐり、カウンターを飛び越えて、禿げ頭を踏み台にして、御
簾の奥へ駆け込んだ。

「あっ、このガキ！」

掴んだら、マントだけだった。

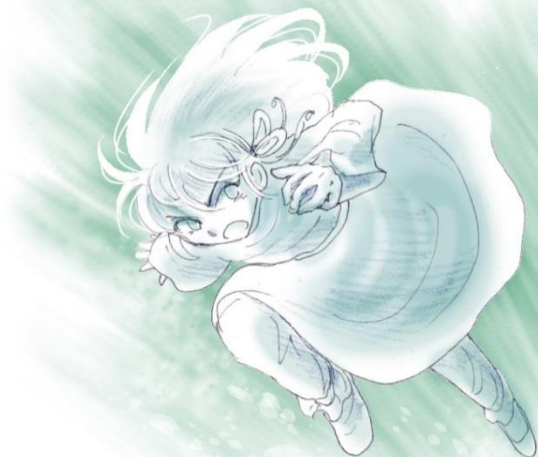
女の子はざんばら髪をなびかせて、建物の奥へ駆ける。

狭い通路に、頑強そうな黒ひげの男を先頭に、何人かの荒く
れが、武器を持って立ち塞がる。

「ふん！」

彼女の足が壁に掛かっただと思つたら、地上を走るみたいに壁
から天井をぐるんと駆け抜け、あつという間に、男達の後ろに
回つた。

「えええい！」



振り向き様に放った旋風で、男達は団子状になって、入り口の方まで吹っ飛ばされた。頭を押さえてやっと立ち上がった小男は、その団子の下敷きになった。

通路の奥は半地下になっていて、頑丈な木の扉に門(かんぬき)が掛かっている。

「じゃかっしー!」

カマイタチ一閃、扉ごと真つ二つになった。

分厚い扉が倒れる。

中は、思いの外広々とした空間で、木の板や工具が立て掛けられている。明かり取りの窓が天井近くに細く連なり、一番奥の椅子から、立ち上がる影があった。

女の子は、両手を広げてその影に駆け寄った。

「ナユタ!!」

天井からの細い光とロウソクに浮かぶのは、薄紫の髪に白い顔の、可弱そうな青年だった。

「助けに来たわ!」

女の子は駆け寄って、彼の両手を取った。

「リリ・姉さん・?!」

そつ、草原で出会った商人が持っていたのは、外見だけはそっくりな、風露の印の入った三弦。でも、風露生まれのリリの目は、ごまかせなかった。偽のまがい物…!!

どこのどいつが！と、憤りつつ触れてみると、地下の暗い所で一心不乱にブリッジを削る、この弟の姿が視えたのだ。

先日、十数年振りに会った、実の弟ナユタ。自分は蒼の妖精として生まれ、この子は風露の子として生まれだけれど、かけがえない弟である事に、変わりはない。

「何て事をさせられていたの?! 可哀想に。もう大丈夫よ、逃げましょう。誰にも内緒にして来たわ。父さまにも言っていないから、安心して」

背後の入り口に、ドタドタと大勢の足音がした。

ヒトの大切な弟を監禁して、愛する風露に泥を塗った、腐った「ロツキともおおお——!!

リリの怒りが沸点に達し、火花をキンキン鳴らしながら竜巻が起こった。部屋に散らばっていた板や道具が、凶器となって飛び上がる。

「ま、待って！ 姉さん！」

ナユタが静電気をバチバチ言わせながらリリに抱き付き、同時に雪崩れ込んで来た男達に、大声で叫んだ。

「お前達、静まれ！ このヒトは僕の姉だ！」

「お、親分の姉（あね）さん?!」

一瞬で風が止み、板がバタバタと落ちた。

さんばら頭の女の子が、目をひんむいて、弟を振り向いた。

「お・や・ぶ……?」

「うん、僕が、偽風露ブランド偽造団の親分。いや生まれてこの方ヒトの上になんか立った事ないから、照れちゃうよね」

ケロリと言う弟に、リリは肩から衣服をすり落ちさせながら、口をバクバクさせた。

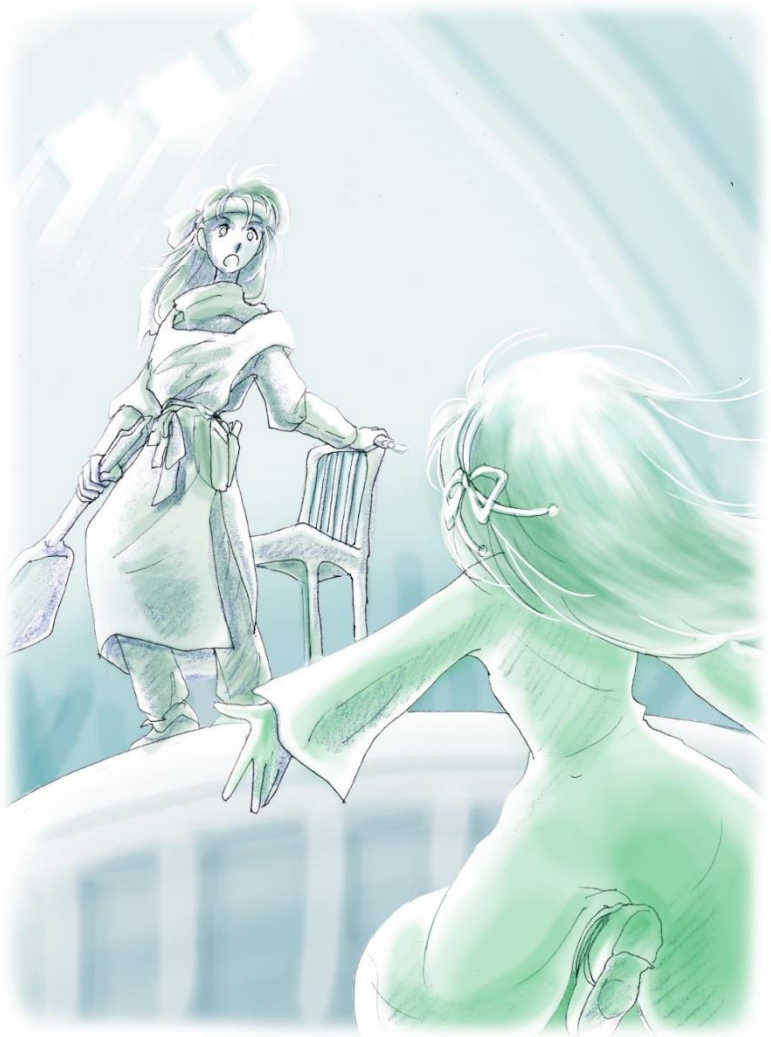
「あ・あ・あんだ・あんだ・あんだ、自分が何をやっているか……」
左右に泳いだ目は、やがて背後の男達に焦点を合わせた。

「あんだ達ね〜！ この子が世間知らずなのをイイコトに、巧い事言って騙したんでしょ〜！」

「うあああ、俺達じゃねえ、そいつから持ち掛けて来たんだ！ 言い出しっぺはそいつだ！ 自分が見本と型を作るから、どんな量産しようって」

男達は、悪鬼のようなオーラを出して迫る娘に後ずさりしながら、必死でまくしたてた。

「嘘おっしやい！」



「嘘じゃないよ、姉さん」

後ろから肩に手を置かれて、リリは口をへの字にして振り向いた。

「何やってんのよ、あんた、何やっちゃってんのよ…」

紫の大きな瞳から、涙がポロポロ溢れた。

「姉さん、落ち着いて」

ナユタは、姉を椅子に座らせて、男達に命じて散らばった物を片付けさせた。本当の本当に、親分らしい。

弟が、風露の楽器職人として落ちこぼれていたのは、知っていた。

「だからってあんた…こんな形で恨みを晴らさなくても…」

「姉さん、僕は誰も恨んでなんかいないよ。自分の考えでやっているんだ」

リリは涙でぐしゃぐしゃの目を上げた。

「ど、どんな考えだして……」

「僕の目標は、この世界に、偽風露ブランドを蔓延させる事なんだ」

「なんですってええ!!!!」

リリはもう一度立ち上がった。

「ナユ、そこに控えなさい! 風露の民として姉として、責任持って貴方の両腕を切り落とします!!」

片付けをしていた男達の方が、ビビって物を取り落とした。

ナユタは静かに、取り乱した姉を見た。

「姉さんがそう言うのなら、従うけれど…、話くらいは聞いてくれるよね」

「うん」

能面のように無表情に言って、リリはドスンと座り直した。

「この世界が偽風露ブランドで埋め尽くされたら、どうなると思っっ」

「それは勿論…酷い事になるわ」

「酷いってどんな？」

「どんなって…?」

「実はあんまり何も変わらないんだよ、姉さん。ただ、風露ブランドと偽風露ブランドが存在する世界になるだけだ」

「…っ?」

青年は、削りかけのボディを手に取って撫でながら、訥々とつとつと続けた。

「そもそも、風露の楽器はあの谷で、一個一個受注生産される物だ。注文は直接来た者からしか受け付けない。そのヒトの身体に合わせるんだから。そんな事、風露の楽器を愛する者なら、

皆知っている事だろう?」

「…そうだけね?」

「だから、世の中に偽ブランドが一杯フワフワ存在したって、風露の楽器を愛する者達の迷惑にはならない。あそこ以外から買わないんだから」

「へ…屁理屈だわ!」

そんな理由で詐欺を正当化されたら堪らない。

「風露の民が紡いできた歴史は?! 尊厳は?! それらを土足で踏みじめる行為なのよ!! 風露の子である貴方が、何でそれをやっちゃおうのよ?!」

顔色を変える姉を眼前に、弟はあくまで静かだった。

「ねえ、姉さん…、偽物が無い世界の方が、酷い世界だったんだよ…」

「?」

「知ってる? 姉さん。風露の楽器を得る為に、他人を殺めるヒトがいる事を?」

後ろで片付け物をする男の何人かが、肩をピクツとさせて、身を縮こませた。

「え…?!」

「特別な事じゃない、そこいらで」

ていたんだ。金持ちがプレミア物だと欲しがって、法外な金子で引き取るから」

「…!!」

「歴史も尊厳も、プレミア的価値観も、ヒトを傷付けて殺めていい理由になんてならない。僕の目的は、偽物を蔓延させて、そんな霞(かすみ)みたいな幻想、すべて、地の底に叩き落とす事なんだ」

「あ…う…」

キパリと言いつ切る弟の澄んだ目の前で、リリは何も言い返せなくなった。自分の価値観のちっぽけさが、その目に凌駕されて行く気がした。

「風露の民は、外の世界の事に関心を持たない。黙々と楽器を造るのみ。自分達の造った品物でヒト死に出ているなんて、夢にも思わない。僕はそれでいいと思う。余計な情報が入ったら、あのヒト達、楽器を造れなくなる」

「そ、そうね、そうよ…」

「じゃあ、だから、これは、僕の役割だと思ったんだ。風露を破門になった僕の。あちこちたらい回しにされたお陰で、風露の七種類の楽器の外見だけなら、完璧に造り上げる事が出来る僕の」

「……」

「これが、僕が、風露を出てからずっと考えていた、『自分が、風露の為に出来る事』だよ」

「……………」

父様に言つのなら、出来れば勘当して下さいって、必ず付け足しておいてね、との言葉を受け取って、リリはフワフワと半地下を後にした。

・・・そういう事、全く知らない訳ではなかった。

金持ちが欲しがるブランド物に、風露の楽器が含まれている事も、勿論知っていた。ただ、自分は…貧富も欲も犯罪も、当たり前になり過ぎて、受け流してしまっていたのだ。

ナユは、自分より遥かに純粋なんだ。俗にまみれてしまっている自分と違って。

彼女が部屋を出ると、気の弱そつな大男が、修繕した扉に門を掛けた。

「どうして門を掛けるの？」

「お、おあ、副長に言われているだけだよ」

「副長……」

「さっきカウンターであんたとやり取りをした、小さな男だよ」

やっぱり、上手く丸め込まれて利用されているだけなのかもしれない。どうしよう、このまま放って置く訳には行かない。

焦然と廊下を歩く娘に、大男がもじもじしながら、声を掛けた。

「なあ、姐(あね)さん」

「姐さんって誰よ」

「親分の大姉様だから、姐さん」

「…本っ気で、やめて頂戴!」

「親分の腕を切り落とさないでくれ」

「落とさないわよ。そもそも、あんた達が勝手に祭り上げているだけでしょっ？」

「んな事ない、俺達の本当の親分だ」

「どうだか？」

「他の連中は知らないけれど、俺は…助かっているんだ。もう、山賊や押し込み強盗をやったり、弱い者に酷い事したり、嫌な事をせずに済むんだ」

「……………」

御簾をくぐって表のカウンターに出ると、すだれ禿げの小男が、面倒臭そつに椅子から立ち上がった。

「お帰りで、姐(あね)さん……」

「だからそれは、やめて頂戴!!」

リリは鼻から息を吐きながら、小男を睨み付けた。

「あたしは納得しないわよ。あんた達、相当の事をやって来たみたいだね。そんな連中が、あんな可弱い青二才の子分になんて、なる訳ないじゃない」

「嬢さんがそう思うんなら、それでもいい」

「ふん」

「俺自身にも分からないしな。何であんな兄ちゃんところむぢなになったのか」

「……」

「ただ、あの親分といると、楽だ、心地良いわな。何もかもストリートにそのまんまだから、何にも勤めらなくていい」

「……」

リリは怒っていた肩を脱力して、商人との約束の、三弦の返金を求めた。小男が金勘定している間、店奥の隅にハンテコな形の楽器を見付けた。三弦だが、風露の型ではない。

「それに触るな!」

手を伸ばすリリに、小男が叫んで引ったくった。

「売り物じゃないのっ」

「違う違う、俺のだ」

「?? あんたのお?」

「楽器商をやるのなら、ちょっとくらい弾けないと信用されないって、あの兄ちゃんが作ってくれたんだ。どうせなら、他にないカッコイイのにしてくれて言ったら、こんな形にしてくれた。どうだ、良いだろう!」

「良い…わね……」

リリは思わず口走ってしまった。本当に、変な形が彼の小さな身体にピッタリはまって、じっくりしていたからだ。

「ちっとは弾けるようになったんだぜ。聞かか?」

小男は、リリの返事を待たずに弾き始めた。ちっとも上手くないし、メロディーすらあやふやな演奏。でも、得意気に嬉しそうに弦を爪弾く悪党を見て、リリは何だか妙に得心が入った。

「門は、弟の為に掛けてくれているのね」

「ふん」

小男は聞こえない振りをして、弦を弾き続けた。

「本当にあの子が窮地に陥った時は、あんた達が、罪を皆被るつもりでいるのじゃあ?」

「……」

「門を掛けて監禁している形を取って」

「俺達は捨てるモンなんかねえからな。あの兄ちゃんと違って」

夜明け前の、薄水色の放牧地。

「でも馬も寝静まった里で、小さなフントンの光に浮かぶ影が二つ。」

「話してくれて有難う、リリ」

蒼の長は、娘の冷えた小さな肩に手を置いた。

さっき、二日振りに、いきなり気配を現した娘を察して、フントンを灯して急いでここに来たのだ。

「ごめんさい、父さま。こそこそ呼び出すような真似をして」

「いや、難しい問題だ。リリが他の誰にも聞かせたくなかったのも分かる」

「うん…」

「しかし、ナユ…、あの子、母親に似てぶっ飛んでるなあ」

「勘当…するのっ」

「する訳ないだろう。私とは違う考え方だが…いやしかし……ぶっ飛んでるよね」

「うん…」

父の反応が、蒼の長としてより、父親として、少し嬉しそうですらあるので、リリはホッとした。

「ラウ老師にだけは、知らせておかねばならないね。あの方な

ら解って下さる。風露の部落その物をも、良からぬ輩から守りたいナユの気持ちを」

「あ…」

「世間の風露に対する評判は落ちるだろうが、それきでは、あの部落はつしない。その為に、外界と厳しく隔絶しているのだから」

「……」

「ま、でも、他から耳に入ってしまう前に、早い目に報告に行かねばね。私が直接伺おう。今から出れば、朝の音合わせの頃だろう」

「あの、父さま…」

リリは急にかしこまって、一歩進み出て背筋を伸ばした。

「あたしも同道させて下さい」

長は、黙って娘を見た。

「そして、この件はあたしに預けて下さい。あたしが、一生この件に関して責任を持ちます。ラウ老師に、そう話を通して下さい。お願いします」

紫のさんばら頭が、初めて、蒼の長に「リリと礼をした。

『責任』の意味は分かるね、リリ」

「はい、父様」

リリは、顔を上げて父を見た。

「あの子が背負った荷物は、同じく風露の子であり風露を出奔したあたしも、分けて背負うべきだわ」

「うん、分かった、任せよう」

長はリリの額に静かに掌をかざした。本当は物凄く抱きしめたい衝動に駆られていたが、我慢した。

もう子供じゃないんだ……。

夕方の執務室前の坂。

呼び止められて、ユウジーンは振り向いた。

「リリ！ 帰って来たのか！」

「当たり前でしょう。ちょっと出張してただけじゃない。」

それよこれ！」

突き出した手には、紫のリボンが握られていた。おまじないに半分は裂いて、カノンが持っていた方の奴だ。

「なに勝手やってくれてんのよ。これ、お気に入りなのよ！」

「だ、だって、うちのカマドの裏に引っ掛かっていたんだぞ」

「だから、探していたのよ。ユウジーンちがカオスだからイクナイんでしょ！」

帰って来たと思ったら、もういつもの自分勝手なリリだ。

「カノンには十分お灸を据えて来たわ。兎に角、あと半分、返してよ。縫い合わせるんだから」

「あ……」

困惑顔で冷や汗をたらすユウジーンに、紫の前髪は眉間にシワを寄せて詰め寄った。

「な・何よ！ これえ——?!」

掴みあげた左手首には、紫の……元リボンだった筈の糸が数本、振（よじ）って結ばれているだけだった。

「えーと……ごめん……」

「何だったのよ、リボンは?!」

「どうした、またリリを怒らせたのか？」

ユウジーンにとって、救世主の声がした。

「あっリリだ！」

「リリお姉ちゃんだよ」

「いつ帰ったのお？」

子供達を引き連れた、サオ教官だ。

「センセ……」

「お帰り、リリ」

「は、はい……」

リリはしおらしくなり、ユウジーンはホッとした。

「僕達、約束どおり、ちゃんと黙ってたよ。伝言もちゃんとし

た！」

「そう、ありがとうね」

「ねえねえ、リリオ姉ちゃん、無事に帰ったの、これの効き目？」

「えっ？…きゃああっ!!」

子供達の小さな手首のそれぞれに、やはりリボンの成れの果ての振り糸が、ぐるぐる巻きになっていた。

「物の持ち主を守護する『逆御守り』なんだって？ 分けるにトの数が多い程効きめがあるっていうから、この子達が引き受けてくれたんだ。ほら、私も」

サオ教官は「リリ」して、袖袂へさして、自らの手首の糸をリリに示した。

「……」

「リンの蹴り玉チームの連中や、何故か既番さん達も貰いに来てね。聞いたら、噂の末端では、君が偉く危険な所に赴いている話になっていたよ。ホルズ殿までヘリリの御守りあるか？ かって駆け込んで来たぞ。分けている内に、すっかり糸だけになってしまった、ははは」

「……………」

うつ向いて黙ってしまった紫の前髪に、ユウジーンが怒る怒る声を掛けた。

「あ、あの、リリ、ごめんね……」

前髪は動かない。

「えと…み、みんな、リリが帰って来たから、御守りは回収し引きつけて叫ぶユウジーンに何かを察して、子供達は手首の糸をほどいた。

「リリ、残りの糸も必ず集めて、三峰に持って行って、…その、えっと、何とかして貰うからっ」

サオ教官も事態を把握して、眉を寄せて気の毒そうにユウジーンを見た。これだけ、やる事なす事裏目な若者も、珍しい。

「い…」

リリがやっと喋った。

「リリっ」

「それ、返してよー！」

白い指がびゅっと伸びて、ユウジーンの集めた糸の束を引ったくった。サオ教官が屈んで何か言い掛けたが、彼女の顔を見てやめた。

「こ、これ、あたしだから!!」

掴んだ糸の束を胸に当てたまま、リリは踵を返した。そうして、雪の坂を、階段を二段飛ばしに昇るみたいに、一気に駆け行ってしまった。彼女の立っていた足元の雪を、ふたつみっつのしずくが溶かすのを、サオ教官は見ていた。

その夜の内に総ての糸を回収し、教官はカノンの所に届けた。

翌日から執務室で働く娘の髪は、ざんぱりではなく、器用なカノンが綺麗に編んだ紫の紐で、美しくきっちり結われていた。

〜おしまい〜

二〇一四・三十一





風の末裔シリーズの紙の本の制作は、
この7thシーズンで、ひとまず終了です。
新作は、ホームページの方で、ぼちぼち書いて
行きたいと思っています(278頁参照)。
書き溜めた物語を本にしようと思いついて
から4年・・・長かったぁ・・・
こんな拙文にこれまでお付き合い下さって、
本当にありがとうございました

西風 そら

